

成果報告書

一橋大学 国際・公共政策大学院 グローバルガバナンス・プログラム 2年

実 習 先：防衛省大臣官房秘書課

研究課題：国際的な安全保障環境改善のための取組み

実習期間：9月2日（月）～9月13日（金）

1 インターンシップの志望動機

本インターンシップの志望動機は、主に以下の5点であった。

- ・将来の職業選択の参考とすること。
- ・大学院における一年間半の学習を踏まえ、当該期間中に行われる議論にて、主体的に、期待される水準の意見を発すること。
- ・自身の研究テーマとの相互関連を意識し、国際機関や内部部局職員からのブリーフィングを、新たな知見獲得の機会とすること。
- ・通常では立ち入ることが難しい関連施設の視察を行い、現場を肌で感じる。
- ・防衛省の現在の立ち位置を確認しつつ、国際平和交流や防衛交流のあり方について学び、自身のリサーチペーパー執筆に活かすこと。

2 実習内容

本インターンシップは説明会方式にて執り行われた。

その大まかな内容は以下の通りである。

- ・防衛省職員および自衛官による講義
- ・省内施設や基地等における見学
- ・参加学生によるワークショップ

なお、具体的なスケジュールについては下表を参照いただきたい。

	午前（10:00～12:00）	午後①（13:00～15:00）	午後②（15:15～17:15）
9/2（月）		ガイダンスおよび自己紹介 防衛省総論と防衛事務官 の役割 （講師：秘書課）	秘書課長表敬 市ヶ谷台ツアー
9/3（火）	大臣会見見学 空幕広報室見学 および意見交換	現在の国際安全保障環境と 我が国の防衛政策の基本 （講師：防衛政策課）	中国情勢 （講師：調査課戦略情報 分析室）

9/4 (水)	自衛隊における防衛交流、 防衛対話 (講師：統合幕僚監部 防衛交流班)	国際平和協力活動等の変遷 (講師：国際協力課)	UNMISS説明 (担当：国際協力課) CRF 隊員インタビュー のための事前準備
9/5 (木)	日米安保体制 (講師：日米防衛協力課)	グループワーク (日米防衛相会談のための 発言要領作成)	グループワーク発表・講評 (講師：日米防衛協力課)
9/6 (金)	座間駐屯地見学 (CRF 概要説明、隊員 インタビュー)	米軍キャンプ座間見学 (概要説明、意見交換)	
9/9 (月)	インテリジェンス (講師：調査課戦略情報 分析室)	海賊対処活動 (講師：事態対処課)	インタビュー記事作成 (担当：国際協力課)
9/10 (火)	インタビュー記事作成 (担当：国際協力課)	サイバー空間を巡る 安全保障上の課題 (講師：防衛政策課戦略 企画室)	弾道ミサイル防衛および 宇宙空間の利用 (講師：防衛政策局)
9/11 (水)	防衛外交 (講師：国際政策課)	国際平和協力活動の現実 (講師：統合幕僚監部 国際協力室)	ディベート (英国によるシリア介入の 是非)
9/12 (木)	自衛隊高級幹部会同見学 ワークショップ事前説明 (担当：国際協力課)	ワークショップ討議① (UNDOF 撤退の是非)	南スーダンにて活動中の 隊員との意見交換 ワークショップ討議②
9/13 (金)	ワークショップ討議③	ワークショップ発表・講評 (担当：国際協力課)	若手職員との意見交換会 インタビュー記事返却

3 実習を通して得られた成果

今回の実習に参加させていただき良かった点は、三つある。一つは自身の研究テーマへの知見を広めることができたこと、また一つは官庁での職務の一端を知ることができたこと、そして、通常では立ち入ることの難しい米軍基地（座間キャンプ）や大臣会見、高級幹部会同などを見学させていただいたことの三点である。

とくに、一点目に関しては、自身が本年度リサーチペーパーを執筆するにあたり、大変有益なものとなった。実習冒頭の講義においても、我が国の防衛政策についての話があったが、「我が国周辺の安全保障環境は、一層厳しさを増している（たとえば、平成 25 年度の防衛大綱の見直し）」。「そうした中、本実習は、防衛省が、国際的な安全保障環境改善のためにどのような取組みを行っているのか、体系的に学べる機会となった。

この点に付言するならば、本実習においては、日本のUNMISS（国連南スーダンミッション）への貢献について多角的に学べたことで、理解が深まった。とにかく、研究では「（人員を）出すか、出さないか」の議論に焦点があたりがちである。しかし、現場で働く自衛官の声を聞けたことで、日本の行う国際平和協力活動の価値を再認識することができた。手前味噌のように思われるかもしれないが、その点を差し引いたとしても、日本の自衛隊、および彼らの行う業務の質は高い。私の目下の目標は、いかに彼らの業務を、国連のスタンダードと比して過不足なく執り行えるようにするか、論理を組み立てていくことである。

また、本実習中、適宜グループワークなどの時間が設けられていたが、こうした経験を通じて、官庁における業務について理解を深めることができた。資料作成時の文言調整やディスカッションにおける想定問答の作成など、細かい点にまで力を入れられたのは、多くの「席上回収」の資料をご提供いただき、抽象的な議論に終始することがなかったからである。

なお、先のUNMISSに関する内容としては、参加学生による、派遣隊員へのインタビュー及びその記事作成が行われた。忙しい中、国際協力課の皆さまには幾度と助言をいただき、今秋には成果物が防衛省の広報ないしホームページ等で活用されるとのことである。

そして、座間キャンプの視察や自衛隊高級幹部会同の見学など、普通では窺え得ない現場に立ち会うことができたことは、存外の喜びである。むろん、現役自衛官の方と直に意見を交換する機会、それ自体が貴重であったことは言うまでもない。こうした経験から得た知見も、今後の日本の安全保障（政策）について考える際には、常に頭の片隅にとどめ置くようにしたい。

4 その他気付き・所感等

今回の実習を通して印象的だったのは、防衛省で働く職員の方々の優れた安全保障観である。これは、彼らの言葉を借りるとすれば、『「現場」を持つ省庁ならではのバランス感覚』なのだろう。こうした視座は、私がリサーチペーパーで取り上げるだろう集団的自衛権と国際貢献を考えるに向け、多くの示唆を与えてくれた。

最後に、本実習を通じてこのような貴重な経験が得られたのは、協力いただいた多くの防衛省職員および自衛隊隊員の方々のおかげである。とくに防衛省大臣官房秘書課の水谷、安田両氏には、事前のアナウンスメントの段階からきめ細やかなご対応をいただき、大変お世話になった。この場を借りて御礼申し上げたい。

※なお、本成果報告書は、人事院人材局企画課人材確保対策室に提出した「実習結果報告書」と同一の内容であり、同室への提出に先立ち、防衛省大臣官房秘書課の方に確認を依頼した。

以上